デジタル時代の教育とメディア②

幼稚園・保育所における メディア利用の現況と今後の展望

～2006年度NHK幼児向け放送利用状況調査を中心に～

小平さち子

はじめに

NHK放送文化研究所では，1950年以来「学校放送利用状況調査」を実施しているが，ちょうど50年前，1957年からは，調査の対象に幼稚園と保育所も含めて，全国の保育現場における放送番組の利用実態と番組に対する意向，新規メディアの普及・利用実態や関心などを調べてきた。幼児を取り巻く教育環境，社会環境の変容に目を向け，時代の要請に応える放送の役割を探り，新たな番組の開発や編成に役立てるねらいで，様々な観点から分析を続けてきた。1983年から6年間放送された『おーい!はに丸』も，この調査の成果から生まれた番組のひとつである。

本稿では，次の項目に沿って，2006年度調査の結果を紹介するのと合わせて，「幼児教育とメディア」に関する最近の研究成果にも目を向け，今後の幼児向け教育サービスの課題と展望について考察を試みる。

1. 幼児向けテレビ番組50年の変遷
2. 幼稚園・保育所における放送利用の現況
3. 定着したビデオの利用
4. 幼稚園・保育所におけるパソコン利用の位置づけ
5. 幼稚園・保育所におけるメディア観と今後の展望

1. 幼児向けテレビ番組 50 年の変遷

(1) テレビ初期から充実していた幼児番組

日本では，テレビ放送開始の当日（1953年2月1日）から，子ども向け番組の放送が行われていた。そのわずか3年後（1956年）には，「幼稚園・保育所向け」の2番組『**人形劇**』と『**みんないっしょに**』で，幼児を明確な対象とするテレビ教育番組の定時放送が始まっている（pp.66～67の**年表**参照）。

1956年には，文部省から「幼稚園教育要領」が告示され，幼児教育における6領域（健康，社会，自然，言語，音楽リズム，絵画製作）の考え方が示された。放送でも，これに呼応して番組の種類を増やし，1960年度には6種類の番組が，月曜日から土曜日まで毎日，放送されるようになり，さらに2年後には再

表1　調査の概要

調査期間：2006年9月1日（金）～12月1日（金）
調査方法：郵送法，督促2回
調査対象：幼稚園は「2006年度全国学校総覧」（原書房刊）から系統抽出。保育所については，各都道府県から入手した名簿から抽出。

調査対象および有効回答数（率）

校種	総園所数	抽出比	標本数	有効回答	有効回答率
幼稚園	13,617	1/17	801	519	64.8%
保育所	22,355	1/27	827	512	61.9

放送の時間帯も登場している。1959年には，家庭視聴向け番組『**おかあさんといっしょ**』の放送も始まったが，これは，テレビによる幼児教育の可能性を世界に広めるきっかけとなった『**セサミストリート**』の放送がアメリカで始まる10年前のことであった。

1960年代には，質量ともに幼児向け番組が急成長し，幼稚園・保育所での利用も大きく伸びた。この時期，テレビのカラー化が進められていたが，教育テレビでは幼児番組が最優先となり，1965年度には，すべての幼稚園・保育所向け番組のカラー化が完了した。

今でこそ，世界各地で“幼児向けテレビ”が注目され，専門チャンネルによるサービスも話題になっているが，テレビ初期からこのように幼児向け教育番組の充実に力を注いでいた例は，世界的にみても極めて珍しい。

(2) 社会のニーズに対応した新番組の開発

1970年には，20年の長寿番組となった造形番組『**できるかな**』の放送が始まっている。また，『セサミストリート』の影響もあって，1970年代には，民放各局で幼児向け新番組が続々登場する状況もみられた（年表の注記参照）。

1980年代には，『**ばくさんのかばん**』（数と言葉の番組。80年度から7年間放送）や，『**おーい！はに丸**』（3歳児向け言葉の番組。83年度から6年間放送）などの新しい分野の番組が登場している。これらの番組は，1970年代後半の幼児向け放送利用状況調査によって，幼稚園・保育所における3歳児在籍率の増加，数や文字の指導に対する関心の急速な高まり，4・5歳向け番組を3歳児に見せている園所が多いことが明らかになったことから，保育現場の要望にも応える形で開発されたものである。

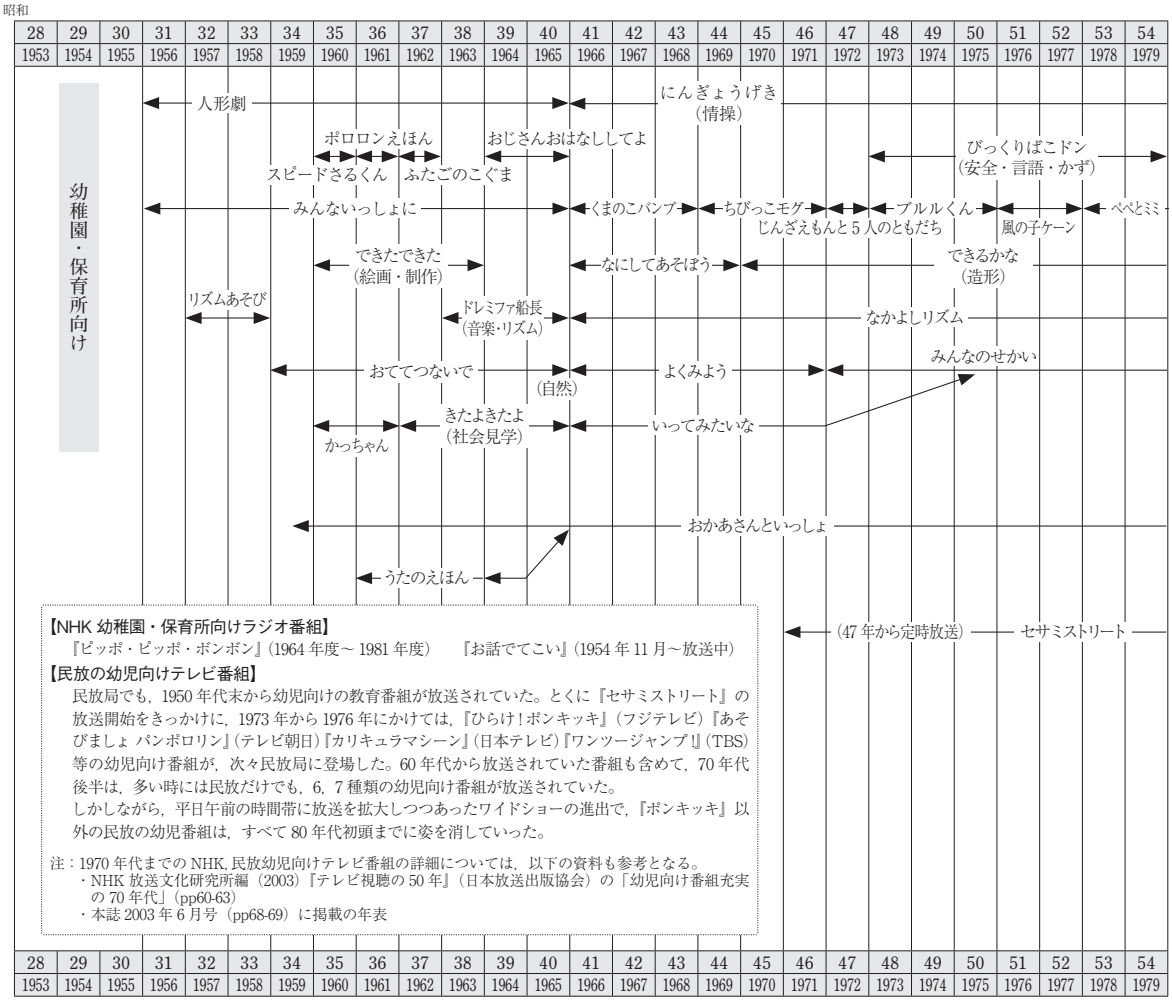
また，1970年代後半には，様々な調査から，低年齢幼児のテレビ視聴時間が長いことが明らかになり，番組制作者と研究者が共同で視聴実験を繰り返しながら，2歳児を対象にした番組の開発を始めた（**二歳児テレビ番組研究会**）。その成果は，「ハイ・ポーズ」（ヨガ），「こんなこいるかな」（1分アニメ）をはじめ，数々の人気コーナーとして『おかあさんといっしょ』で放送されてきた。一連の研究成果は，他の幼児向け番組の制作にも生かされた。

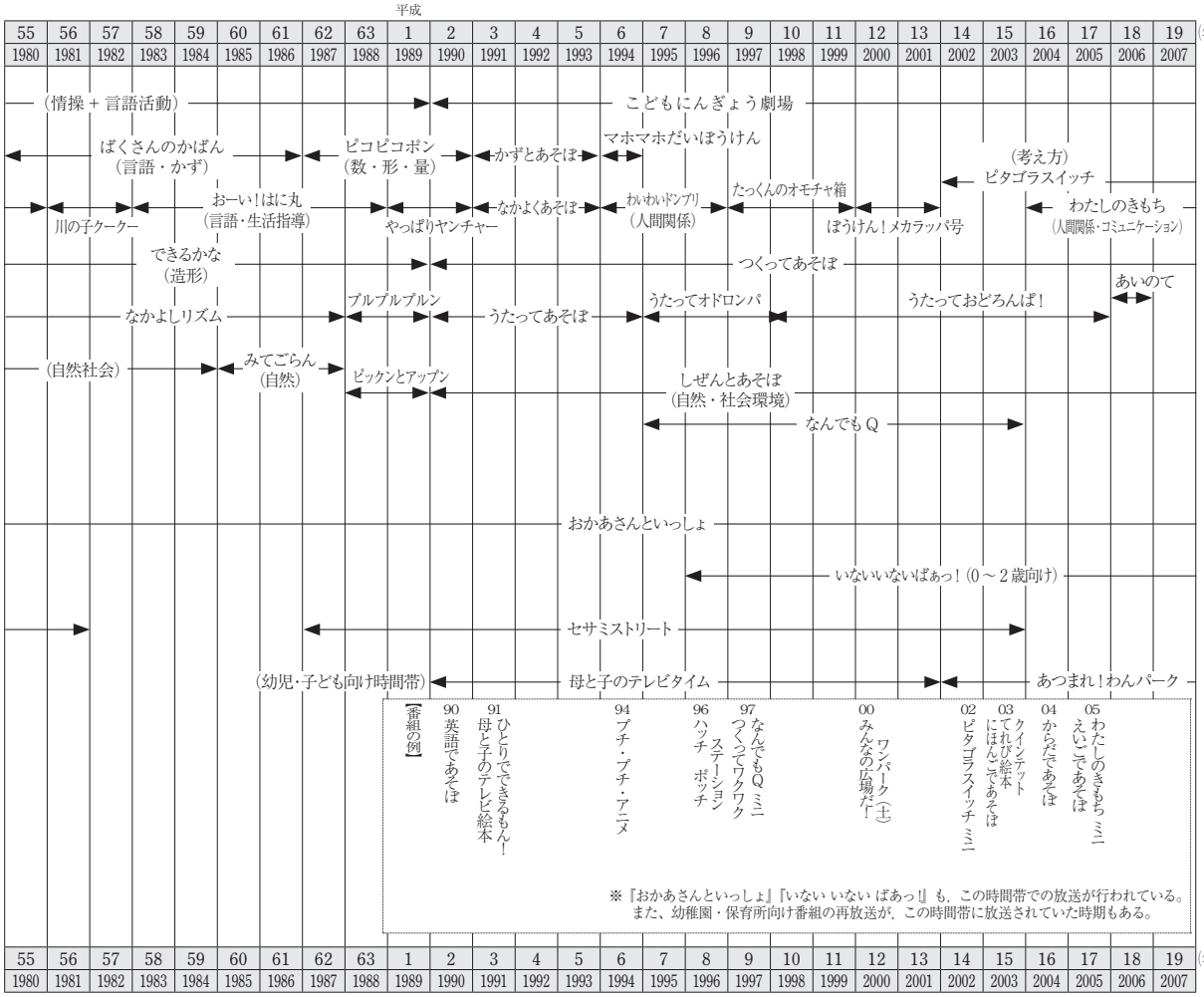
(3) 時代の変容に対応する幼児向け番組

1990年代に入ると「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」の改訂（1990年4月実施）に伴い，NHK幼児向け放送開始以来の大規模な番組の改編が行われた。新しい指針では，「幼児の発達に必要な体験を得るような適切な教育環境」を創り出すことの重要性が指摘され，幼児教育の領域もそれまでの6領域から5領域（健康，人間関係，環境，言葉，表現）に変わり，時代の変化に応じた工夫で，新しい番組の開発が進められ，今日に至る。

家庭での視聴を中心とする時間帯に放送される幼児向け番組も，1990年度以降，教育テレビに設けられた「母と子のテレビタイム」という時間帯で集中的に放送されるようになった。ここに登場した番組には，『**英語であそぼ**』（現在は『**えいごであそぼ**』），『**母と子のテレビ絵本**』（現在は『**てれび絵本**』），『**にほんごであそぼ**』，『**からだであそぼ**』などが含まれる。さらには，子どもが初めて出会うテレビを通して豊かな感性を育てるねらいで，外部専門家の協力も得て0～2歳向けに開発された『**いない いない ばぁっ！**』（1996年～）なども含めて，多様な幼児向け番組の放送が続いている。

幼児向け番組に関する年表





年度	内容
1981・6	文部・厚生両省の幼保懇談会，3年半の協議結果を発表
1983・11	中央教育審議会，幼稚園教育内容，方法の改善について検討を提言
1984・7	文部省「視聴覚教育課」を「学習情報課」に改称
1985・9	教育課程審議会発足（幼・小・中・高の一貫性ある教育課程の改善を諮問）
1985年	学校放送開始50年
1986・9	幼稚園教育要領に関する調査研究協力者会議とりまとめ
1987・11	『幼稚園教育の在り方について』発表
1987・11	『にんぎょうげき～くもの糸』第16回「日本賞」郵政大臣賞受賞
1988・11	NHK／CTW共同制作『ビッグバードがやってきた』日本で放送
1989・1	教育テレビジョン放送開始30年
1989・1	タイ版「おかあさんといっしょ」放送開始
1990・4	改訂『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』施行（5領域の設定）
1990・4	幼・保向けテレビ番組大幅改訂／『母と子のテレビタイム』の開始
1990・11	初の幼児向けハイビジョン番組の公開保育
1991・11	ハイビジョン試験放送開始
93年度	『しぜんとあそぼ』のハイビジョン化開始
1993・3	文部省『幼稚園施設整備指針』策定
94年度	文部・厚生省他により『今後の子育て支援施策の基本的方向について』（エンゼルプラン）策定
94・12	衛星第2で，幼児向け番組の放送開始
95・2・2	文部省『幼稚園設置基準』の一部改正
95・2・2	放送開始70年
96・2	文部省『幼稚園における園具・教具の整備の在り方について』発表
97・11	文部省『時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方』について最終報告
98・4・6	中教審最終答申『幼児期からの心の教育の在り方について』
98・4・6	『おかあさんといっしょ』のすべての放送が教育テレビに移行
99・1	教育テレビジョン開始40年
00・4	改訂『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』施行
01・3	文部科学省「幼児教育振興プログラム」策定
02・6・8	「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」閣議決定
02・6・4	文科省『幼稚園教員の資質向上について』（調査研究協力者会議報告書）発表
02・6・4	小学校・中学校で『新学習指導要領』施行
03・10・2	中教審に幼児教育部会が発足
03・11・2	テレビ放送開始50年
03・11・11	保育士資格の法定化の施行
03・11・11	『ピタゴラスイッチ』第30回「日本賞」総務大臣賞受賞
05・12・2	文科省・厚労省合同検討会議「就学前の教育・保育を一体として捉えた一貫した総合施設について」公表
06・6・10	中教審「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在りかたについて」答申
06・6・10	「就学前の子どもに関する教育，保育等の総合的な提供の推進に関する法律」制定
06・6・10	認定こども園の発足
06・6・12	「教育基本法」改正
06・6・12	文部科学省「幼児教育振興アクションプログラム」を策定

2. 幼稚園・保育所における放送利用の現況

(1) NHK テレビ・ラジオ幼児向け番組の利用

NHK幼児向け放送利用状況調査では，教育要領・保育指針に基づいて制作され，幼稚園・保育所向けとして放送されている番組に，本来は家庭視聴向けだが，幼稚園・保育所での利用も想定される『**おかあさんといっしょ**』と『**いない いない ばあっ!**』を加えたものを「NHK幼児向け番組」と定義している。2006年度は，**表3**に示したものが該当番組である。いずれかの番組を調査年度に利用している幼稚園・保育所の比率を「**NHK幼児向けテレビ（ラジオ）利用率**」と定義しており，2006年度のNHK幼児向けテレビ利用率は，幼稚園33.3%，保育所45.5%である（**表2**）。2年前の前回調査時の利用率との間に有意差はないが，1990年以降，テレビ利用の漸減傾向が続いている（その背景については後述，p75）。

幼稚園では，これまで同様『**こどもにんぎょう劇場**』と『**つくってあそぼ**』の利用が多い（**表3**）。保育所では，長年『**おかあさんといっしょ**』『**いない いない ばぁっ!**』が利用の多い2番組であったが，2006年度は，ごくわずかの差ではあるが，『**ピタゴラスイッチ**』が『いない いないばぁっ!』を上回り，第2位となった。『ピタゴラスイッチ』は，ものの考え方を育てる新しいタイプの番組として2003年から2004年にかけて内外のコンクールでも高く評価されたが，2002年度の放送開始以来，とくに保育所を中心に利用が増え続けている番組として注目される。

表2　NHK 幼児向けテレビ・ラジオ利用率

（100%= 全園・所）

校　種	テレビ		ラジオ	
	利用率(%)	推定利用園所	利用率(%)	推定利用園所
幼稚園	33.3 (35.1)	4,534 ±542	3.9 (4.2)	531 ± 222
保育所	45.5 (49.9)	10,170 ± 953	1.8 (2.6)	402 ± 254

注1（ ）内は，2004年度の数値である。

(2) NHK 幼児向け以外の番組利用

この調査では，**表3**に示した番組以外のテレビ番組の利用についても調べており，2006年度は，幼稚園では15.2%，保育所では34.8%が，このような番組を利用していた。保育所の利用率が高いのは，夕方放送される番組を利用する機会が多いためである。よく見られている番組は，幼児・小学校低学年対象の家庭視聴向

表3　番組別にみた NHK 幼児向け番組の利用（テレビ・ラジオ）

（100%= 全園・所）

	番 組 名		利用率（%）	半数回以上利用率(%)
教育テレビ	こどもにんぎょう劇場	幼 保	20.8　(22.3) 14.3　(15.3)	9.2　(10.5) 8.4　(8.8)
	つくってあそぼ	幼 保	19.7　(22.3) 20.3　(23.2)	8.9　(11.6) 11.5　(12.7)
	ピタゴラスイッチ	幼 保	14.5　(15.6) 29.5　(25.5)	6.5　(7.8) 17.7　(16.7)
	しぜんとあそぼ	幼 保	14.1　(15.8) 7.4　(9.7)	5.5　(6.9) 4.7　(5.5)
	わたしのきもち	幼 保	5.4　(6.3) 7.0　(4.5)	2.5　(2.5) 4.5　(2.1)
	あいのて （2006 年度新番組）	幼 保	1.2 5.1	0.4 3.6
	おかあさんといっしょ	幼 保	12.9　(16.3) 39.1　(44.4)	3.8　(5.0) 24.2　(27.6)
	いない いない ばあっ！	幼 保	4.0　(5.5) 28.3　(31.5)	1.2　(2.6) 19.2　(20.6)
ラジオ第2	お話でてこい（年長児向け）	幼 保	2.3　(3.5) 1.2　(2.4)	
	お話でてこい（年少児向け）	幼 保	2.5　(2.0) 1.2　(1.7)	
	お話でてこい（年中児向け）	幼 保	1.5　(3.2) 0.8　(2.3)	

注1：「半数回以上利用率」とは，1年間に放送される番組の半分以上を利用している幼稚園・保育所の比率である。
注2：（ ）内は，2004年度の数値である。

★表3に示したのは，「NHK 幼児向け放送利用率」算出の対象となる番組だが，それ以外にも幼稚園・保育所では，次のような番組が利用されている。

＊**幼児・小学校低学年児向けの“あそぼ”シリーズ：『にほんごであそぼ』『えいごであそぼ』『からだであそぼ』**（保育所の利用率はそれぞれ，20.9%，15.6%，12.7%）

＊『**ピタゴラスイッチミニ**』『**つくってワクワク**』など，15 分の幼稚園・保育所向け番組を 5 分化した番組　（保育所での利用率は 15.4%）

＊幼稚園・保育所向け番組の前後の時間帯に放送されている小学校向け学校放送番組。

＊『**おじゃる丸**』など NHK のアニメ番組

＊**民放『まんが日本昔ばなし』**

◎表3のテレビ番組に限定せず，それ以外も含めて何らかのテレビ番組を保育で利用している幼稚園は 36.8%，保育所は 49.8%であった。

けの時間帯で放送されている『**にほんごであそぼ**』『**えいごであそぼ**』『**からだであそぼ**』など，NHKの番組が圧倒的に多い。民放の番組では，『**まんが日本昔ばなし**』が最もよく見られている。

(3) 幼稚園・保育所で異なるテレビ利用のタイミングと保育者の役割

2006年度は，幼稚園・保育所が，どのようなタイミングで，また保育者がどのような関わりをもってテレビを利用しているのかについても調べた。

まず，視聴のタイミングについては，幼稚園では，「クラスの子ども全員がそろっている時に保育者の指導のもとで視聴する」(68.2%) という見せ方が圧倒的に多いのに対して，保育所では，「朝全員がそろうまでの時間や帰宅の待ち時間に保育者と一緒に視聴する」(78.1%) が圧倒的に多い (**表4**)。

表4　幼稚園・保育所におけるテレビ利用のタイミング，利用の形態

(100%=NHK 幼児向けテレビ利用園・所)

【複数回答】	幼稚園 (%)	保育所 (%)
1 クラスの子ども全員がそろっている時に，保育者の指導のもとでテレビ番組を視聴する	68.2	38.6
2 朝全員がそろうまでの時間や帰宅の待ち時間に，保育者と一緒に視聴する	27.2	78.1
3 他の保育活動も同時に並行する中で，希望する子どもたちだけがテレビ番組を視聴する	17.3	10.3
4 朝全員がそろうまでの時間や帰宅の待ち時間に，子どもたちだけで視聴する	8.7	4.3

表5　テレビ視聴にあたって保育者が行っていること

(100%=NHK 幼児向けテレビ利用園・所)

【複数回答】	幼稚園 (%)	保育所 (%)
1 テレビ視聴中は，保育者自身が，テレビと一緒になって歌ったり，体を動かしたり，ストーリーに集中するなど，幼児と一緒に視聴に参加する	68.8	73.0
2 テレビ視聴中の幼児の様子を注意深く観察する	52.6	43.3
3 番組視聴後の指導，あそびへの展開に工夫をこらす	37.0	18.5
4 番組視聴する際には，事前にテキストで内容を調べるなど，視聴準備をする	27.2	4.3
5 番組視聴の前に，幼児に対して事前指導を行う	11.6	9.0
保育者は1～5のようなことはせず，自由に幼児たちにテレビを視聴させている	6.4	6.0

テレビの利用に際して保育者がどのような関わりをもっているのかを調べた結果からは，幼稚園でも保育所でも，番組視聴中に「幼児と一緒に視聴参加」しながら「幼児の様子を注意深く観察」していることがわかる (**表5**)。「番組視聴前の準備」「視聴後の遊びへの展開に工夫をこらす」など，視聴前後の対応に力を注ぐ様子は，全員そろっている時にテレビ視聴を行うことが多い幼稚園のほうが，保育所よりも盛んである。

(4) 幼児向けラジオ番組の利用

幼稚園や保育所でのラジオの利用は，1960年代以来，テレビの利用に圧倒されてはいるものの，映像時代に生きる子どもたちが語りと音楽，効果音でイメージを広げることの重要性は保育現場で高く評価され，1954年11月に始まった『**お話でてこい**』は，50年を超える長寿番組となっている。

2006年度現在，幼稚園・保育所のラジオ利用は5%に満たないが，利用園では，ラジオならではの特性を生かして活用していることが，自由回答からもうかがえる。

「耳だけで想像して楽しむ『お話でてこい』は，4月当初は頼りなさげな子どもも，次第に落ち着いて聞けるようになり，集中力と人の話を聞く態度も育っている様に感じている」
(幼稚園)

3. 定着したビデオの利用

(1) ビデオ機器の充実と番組利用の変化

1990年代以降の幼稚園・保育所におけるメディア環境の変化の第一の特徴は，ビデオ関連機器や教材の普及である。2006年度のVTR普

及率は，幼稚園94.6%，保育所90.4%で，すでに飽和状態となっている**(図1，表6)**。VTR保有台数が多い幼稚園・保育所ほど，NHK幼児向けテレビ利用が盛んであるという傾向にもみられるとおり，保育の流れをさえぎることなく，必要なタイミングで番組を利用するという意味において，VTRは重要な役割を果たしている。

また，今回はじめてハードディスク内蔵録画機について調べたところ，幼稚園では16.8%，保育所では12.9 %が所有しており，小学校での所有率15.4%とほぼ同程度である

図1　VTR普及率と市販ビデオ教材の保有・利用の推移

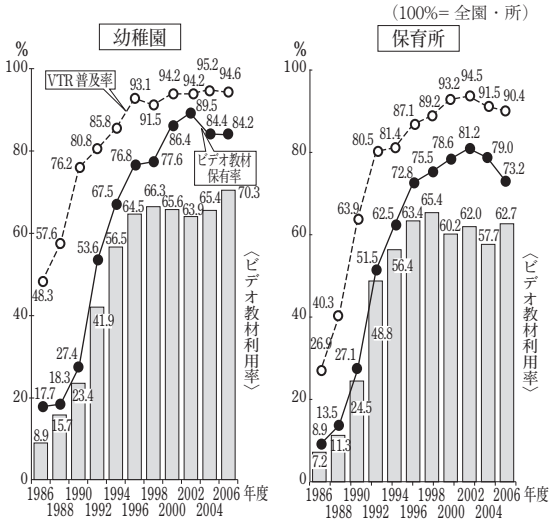
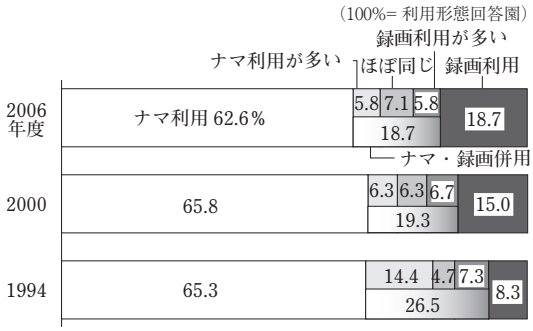


表6　NHK幼児向けテレビ番組利用の有無別にみたビデオ関連機器の普及状況

		VTR		ビデオカメラ	ハードディスク内蔵録画機	市販ビデオ・DVD教材			市販CD教材
		保有率(%)	平均台数(台)	保有率(%)	保有率(%)	保有率(%)	平均保有本数(本)	利用率(%)	利用率(%)
幼稚園	全体	94.6 (95.2)	2.6 (2.8)	63.2 (64.4)	16.8	84.2 (84.4)	34.9 (39.7)	70.3 (65.4)	48.6
	NHK利用園	97.1 (98.6)	3.2 (3.6)	68.8 (66.8)	20.2	90.8 (91.5)	40.2 (39.9)	△82.7 (75.4)	49.7
	NHK非利用園	93.4 (93.3)	2.3 (2.4)	60.4 (63.1)	15.0	80.9 (80.5)	32.0 (39.6)	64.2 (60.0)	48.0
保育所	全体	90.4 (91.5)	2.5 (2.6)	53.1 (53.4)	12.9	▼73.2 (79.0)	34.6 (34.0)	62.7 (57.7)	48.0
	NHK利用所	99.1 (96.2)	3.2 (3.4)	51.1 (52.4)	13.7	▼87.1 (92.0)	38.3 (39.2)	82.4 (77.4)	49.4
	NHK非利用所	83.2 (86.9)	1.9 (1.8)	54.8 (54.3)	12.2	61.6 (66.1)	29.9 (26.2)	46.2 (38.1)	47.0

注1：　(　　)内は，2004年度の数値である。
注2：　平均保有数については，該当機器や教材を保有している幼稚園･保育所あたりの平均値である。
注3：　△▼マークの数値は，信頼率95%で2004年度に比べ有意差がある。

図2　テレビ利用形態の推移〈幼稚園〉



ことがわかった。

長期スパンでみるとVTRの普及によって，テレビ番組の録画利用は増加している(とくに幼稚園)が，全体としてみると，幼稚園，保育所ともに，放送時間帯に合わせて番組を視聴する“ナマ利用”が“録画利用”より圧倒的に多い状況は変わっていない**(図2)**。

(2) 市販ビデオ・DVD教材の利用

VTRの普及がもたらした，より顕著な影響は，市販ビデオ教材の保有や利用の増加という形で表れている。2006年度，市販ビデオ・DVD教材を利用している幼稚園は70.3%，保育所は62.7%で，**図1**にみられるとおり，保有も利用も安定期に入ったといえる。NHK幼児向けテレビを利用している幼稚園や保育所のほうが，そうでない園所より，ビデオ・DVD教材の保有率や利用率が高い**(表6)**。

利用されている市販ビデオ・DVD教材の内容をみると，相変わらず**“おはなし”**に関するものが圧倒的に多い(幼：55.3%，保：46.3%)。続いて利用が多い内容は，**“安全教育”**(30.6%，25.0%)，**“音楽・リズム”**(23.1%，25.2%)**“自然・環境”**(15.8%，14.8%)などである。“安全教育”と“音楽・リズム”は，2年前より利用が増えている。

図3は，“NHKテレビ幼児向けテレビ番組の利用”と“市販ビデオ教材の利用”の関係を示したものだが，「“幼児向けテレビのみ利用”する幼稚園・保育所が減少し，“市販ビデオ教材のみ利用”する園所が増加する」傾向がみられる（とくに，幼稚園で顕著）。

図3　NHK幼児向けテレビと市販ビデオ教材の利用の関係

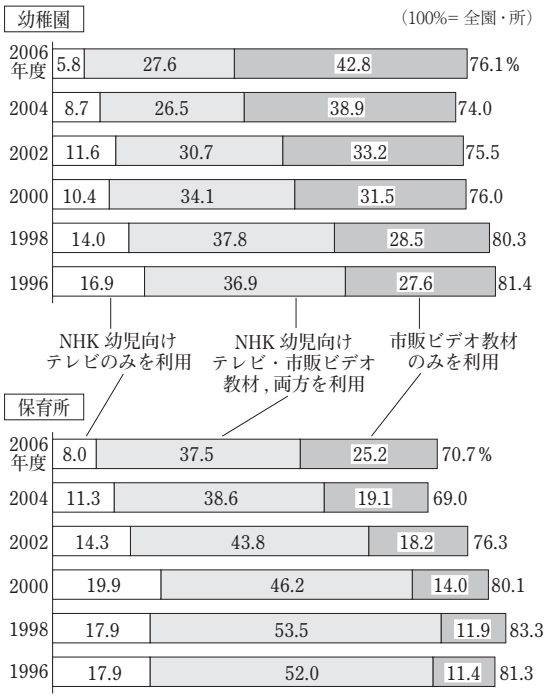
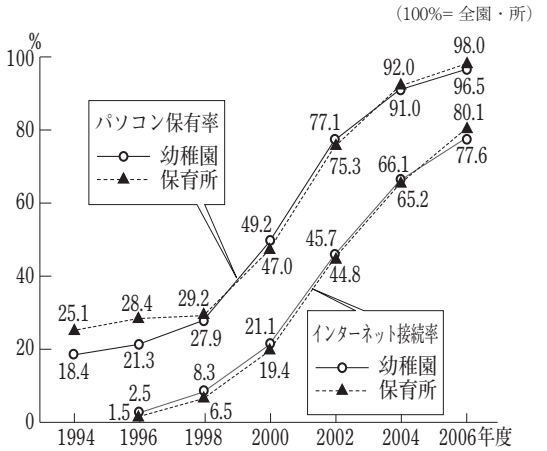


図4　パソコン普及率，インターネット接続率の推移



4. 幼稚園・保育所における パソコン利用の位置づけ

(1) 進展著しい幼稚園・保育所のパソコン環境と保育者による利用の拡大傾向

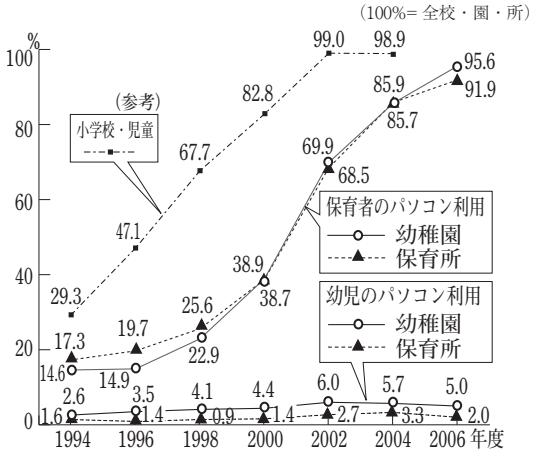
小・中・高等学校のように国による「教育の情報化」計画には組み込まれていない幼稚園や保育所においても，1998年以降，パソコンやインターネットの普及は目覚しい（**図4**）。2006年度のパソコン保有率は，幼稚園・保育所ともに95%を超え，平均保有台数も，それぞれ2.6台，2.7台となった（**表7**）。インター

表7　NHK幼児向けテレビ番組利用の有無別にみたICT関連機器の普及状況

		パソコン		インターネット接続パソコン		デジタルカメラ	
		保有率（%）	平均保有台数（台）	保有率（%）	平均保有台数（台）	平均保有台数（本）	保有率（%）
幼稚園	全体	△ 96.5 (91.0)	2.6 (2.4)	△ 77.6 (66.1)	2.0 (1.6)	△ 80.3 (68.6)	1.6 (1.2)
	NHK利用園	△ 94.2 (87.2)	2.8 (2.1)	△ 74.0 (64.0)	1.8 (1.8)	△ 78.0 (65.4)	1.5 (1.2)
	NHK非利用園	△ 97.7 (93.1)	2.6 (2.6)	△ 79.5 (67.2)	2.1 (2.4)	△ 81.5 (70.3)	1.6 (1.2)
保育所	全体	△ 98.0 (92.0)	2.7 (2.3)	△ 80.1 (65.2)	2.0 (1.7)	△ 73.0 (50.4)	1.5 (1.4)
	NHK利用所	△ 97.9 (93.1)	2.8 (2.3)	△ 77.3 (63.2)	2.0 (1.6)	△ 73.8 (52.8)	1.5 (1.4)
	NHK非利用所	△ 98.2 (91.0)	2.7 (2.2)	△ 82.4 (67.1)	2.0 (1.8)	△ 72.4 (48.1)	1.6 (1.3)

注1：（　）内は，2004年度の数値である。
注2：平均保有数については，該当機器を保有している幼稚園・保育所あたりの平均値である。
注3：△▼マークの数値は，信頼率95%で2004年度に比べ有意差がある。

図5　保育者・幼児のパソコン利用の推移



ネットへの接続も，この2年間で10%以上増え，全国の幼稚園の77.6%，保育所の80.1%が，インターネットに接続したパソコンを保有するに至った。また，デジタルカメラの保有率も急増するなど，保育現場におけるデジタル環境が進展している様子がうかがえる。

こうした環境の中で，パソコンの利用実態に目を向けると，文書作成やデータ処理，情報検索，教材作成などの目的で**“保育者が利用する”**状況が急速に広まっていることがわかる（**図5**）。その背景には，次のような要因が存在している。

① **1998年教育職員免許法**改訂：幼稚園教諭免許取得に，情報機器の操作と活用を含む教科が必修化

② 2002年文部科学省調査研究協力者会議報告書『**幼稚園教員の資質向上について：自ら学ぶ幼稚園教員のために**』：教員の資質向上を支える環境のひとつとして，「コンピュータや通信環境など，情報通信技術を活用できる環境整備の重要性」を記載

(2) 増えない幼児のパソコン利用と保育現場の考え方

これに対して，幼児自身にもアクセスさせて，保育にパソコン活用を取り入れている幼稚園・保育所は，それぞれ5.0%，2.0%で，この10年間，ほとんど増えていない（**図5**）。家庭でパソコンに触れている幼児が増加傾向にあるのとは対照的である（首都圏の1歳6ヶ月～6歳の乳幼児対象の調査結果によれば，1995年7.2%，2000年25.4%，2005年には36.9%がパソコンにアクセスしている）[1)]。

本調査では，**図6**に示した選択肢をあげて，幼児のパソコン利用に対する考え方も調べているが，「幼児期には他に重要な教育があり，パソコンを用いた活動まで行う必要はない」という考え方が主流であることがわかる。

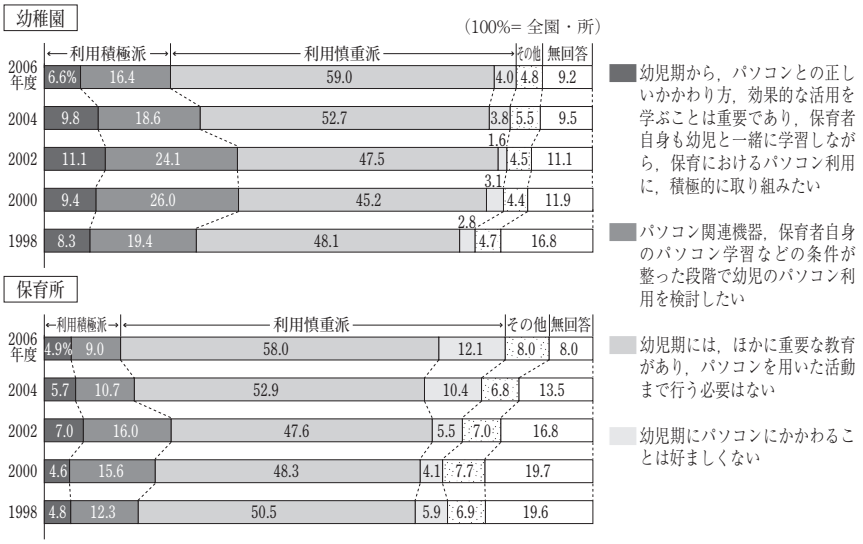
1998年度以降しばらくは，幼児のパソコン利用に対して積極的な姿勢を示す幼稚園・保育所が徐々に増えていたが，2002年度あたりをピークに，最近はむしろパソコン利用に慎重な姿勢を示す園所が増えている。この傾向は，とくに保育所で顕著である。

なお，図示は省略しているが，NHK幼児向けテレビ利用園所と非利用園所を比較すると，前者のほうが幼児のパソコン活用に対する積極度が高い傾向がみられる（幼稚園全体で「幼児のパソコン利用積極派」は23%，NHK利用園では37%，非利用園では16%）。

海外に目を向けると，学校教育へのパソコン導入に積極的な国々では幼児教育段階での導入も視野に入れている例も珍しくない。

イギリスでは，教員研修のための独立

図6　幼児のパソコン利用についての意見の推移



行政法人Teachers Training AgencyがICT活用指導力の育成に力を入れているが，3～5歳児のパソコン活用も前提としており，「いかにして意欲的に利用できるようにするか」「子どもの創造性の発達のために，どのように活用するか」など，教師が留意すべきポイントが示されている。

アメリカでは，全米乳幼児教育協会（National Association for the Education of Young Children）が，1996年，保育にパソコンを取り入れるにあたっての具体的な指針「テクノロジーと3～8歳の子どもたち」を発表している。このことは，幼児期からのパソコン活用の促進に寄与しており，2005年に教育省が発表したデータによれば，保育施設に通っている3歳以上の幼児がパソコンを利用している比率は，幼稚園児67%，保育園児80%にのぼる（調査実施は2003年10月）。

このような状況にあるアメリカと日本の保育現場のパソコン利用に対する意識を比較分析した研究は，アメリカでは，すでに幼児のパソコン利用をどのように効果あるものにしていくかが関心事であるのに対して，日本の幼児教育関係者の間では，パソコンが幼児の能力を十分引き出す可能性や，健全な発達の促進に寄与する可能性について，否定的回答が肯定的回答を大きく上回っており，アメリカとは全く異なる状況にあることをデータで示している[2)]。

(3) 先駆的な保育現場でのパソコン活動

全体状況は以上のとおりであるが，幼稚園や保育所で幼児にパソコンに触れさせる保育は，日本でも1980年代から存在しており，2000年前後から，学会発表や単行本の中で，具体的な保育事例の紹介も増えている[3)]。

紙面の関係で，個別の例には立ち入らないが，様々な事例を分析してみると，パソコンを新しい保育環境やコミュニケーションの場，新しい時代の遊具のひとつと位置づけて，これまでの保育活動をより充実，発展させる目的で活用している例が多いことがわかる。多くのパソコンを整備して，幼児にパソコンを使いこなす学習をさせているわけではない。

パソコンを取り入れた保育は，柔軟な発想を持ち，チャレンジ精神旺盛な保育者たちが，教育学や発達心理学，あるいはメディア研究の専門家たちと連携をとりながら，様々な工夫と実践研究の積み重ねによるところが大きい。パソコン導入にあたって周囲の理解を得るための苦労を経験した保育者も少なくないが，保育者の適切な指導がなされることで，幼児に新しい発見の機会を提供したり，自然との関わりを含めて，新しい遊びを経験させたり，友だちとの関わり・コミュニケーションを学ばせるなど，パソコンの導入が幼児の成長にとって好ましいものとなり得ることを示すヒントが随所にみられる。

相次ぐ出版物の中には，保育者や保育を学ぶ学生向けのテキストの役割を持つものが増えているが，幼児教育・保育におけるパソコンの利用に対する公式な方針，見解が示されていないこともあって，先駆的な試みやその研究成果が教育界・保育界に十分広まっていないのが現状である。

(4) 保育者のインターネット利用への関心

幼児のパソコン利用には慎重ながら，保育者自身の利用が活発になる中で，保育者たちは，関連する省庁や連盟のサイト，子育て

情報を提供する民間のサイトはじめ，様々なサイトにアクセスしている。ホームページを開設する幼稚園や保育所も年々増加し，幼稚園では55.5%，保育所では43.0%となったが，保育内容のヒントを得る目的で，他園のホームページを利用している例も少なくない。また，新しい動向として，「保護者や保育者の書き込みが多いブログを見ている」保育者も登場している。

NHK幼児向け番組関連のホームページに対する認知の広まりも注目される。2006年度調査時点には，『**キッズワールド**』『**幼稚園保育所のひろば**』の2つが存在しており，いずれかでも知っていた幼稚園，保育所は，それぞれ32.0%，30.2%で，2年前の倍以上であった。2つのホームページは，2007年4月に統合され（名称は『**キッズワールド**』），番組内容や関連するビデオ・DVD教材，CD教材，印刷教材の紹介はもちろん，テレビやラジオ番組を取り入れた具体的な保育事例や，実践研究成果も紹介され，新たに放送利用を始めようとする保育者にとっても有益なサイトとなることを目指している。

「キッズワールド」のホームページ

http://www.nhk.or.jp/kids/

幼稚園・保育所に対して，今後パソコンやインターネットで活用したい内容を尋ねてみると，「幼児教育，保育に関するニュース」「保育の実践例や指導案」など，教育・保育情報に対するニーズが大きく，2年前よりさらに期待が高まっていることがわかる（**表8**）。「放送番組利用のための実践例や指導案」をパソコン・インターネットで利用したいと考える幼稚園・保育所は2割未満であるが，やはりこの2年間で増加している。NHK幼児番組のウェブサイトの内容の充実と周知の工夫によって，放送番組利用の意義を，改めて全国の保育現場に広めることも必要と思われる。

表8　パソコンやインターネットで活用したい内容

（100%= 全園・所）

	幼稚園（%）	保育所（%）
1 保育の実践例や指導案	42.2 (39.3)	42.6 (31.0)
2 幼児教育，保育に関するニュース，新しい情報	65.7 (58.9)	61.9 (57.9)
3 放送番組利用のための実践例や指導案	15.2 (9.8)	12.7 (5.9)
4 幼稚園・保育所でのパソコン利用のための実践例や指導案	7.9 (10.0)	5.7 (8.8)
5 子どもや保育者が作った作品などをデータベース化して登録・保存できるソフト	11.8 (15.0)	8.2 (8.5)
6 子ども向けのポータルサイト	2.3 (3.2)	2.5 (1.2)
7 他の園所との交流ができるホームページ	11.6 (14.5)	11.7 (16.1)
8 保護者との交流ができるホームページ	7.5 (15.3)	6.1 (14.4)

注：( )内は，2004年度の数値である。

5. 幼稚園・保育所における メディア観と今後の展望

ここまで，幼稚園・保育所での放送，ビデオ，パソコン利用の現況をみてきたが，続いて，テレビをはじめとする映像メディアに対する保育現場の意識に着目して，今後へ向けての論点整理を進めたい。

(1) 保育現場におけるテレビ観

幼稚園・保育所では幼児向け番組の利用が漸減傾向にあるが，その理由を尋ねた結果を

示したのが，**表9**である。

最初の2項目は，小学校以上の校種でもみられる，時間に関わる理由である。これに対して，「3.幼児は家庭で十分テレビを見ているので，幼稚園・保育所でまで見せたくない」と「4.教育要領や保育指針で直接体験が重視されている」の2つは，幼稚園・保育所に特徴的な項目である。この2項目については，**図7**のとおり，より直接的な設問を準備して，幼稚園・保育所のテレビ利用に対する考えを質問している。教育目的であっても，保育の場でのテレビ利用に対する消極的な意識が年々強くなっていることがわかる。

表 9　幼児向けテレビ番組利用減少の原因
【複数回答：幼稚園で回答が多い順】

（100%= 全園・所）

	幼稚園（%）	保育所（%）
1 保育の内容が多く，テレビを利用する時間の余裕がない	45.3	24.0
2 送放時刻が保育の時間と一致しない	42.4	35.0
3 幼児は家庭で十分テレビを見ているので，幼稚園・保育所でまでテレビを見せたくない	32.2	43.9
4 教育要領，保育指針で，現場の活動や直接体験が重視されている	27.9	32.4
5 番組内容についての事前情報が十分得られない	17.1	14.5
6 簡単に利用できるビデオ・ＤＶＤ教材がたくさんある	17.0	15.0
7 教師・保育士がテレビ利用に関心を示さない	11.0	9.2
8 テレビ番組の録画がめんどうである	9.8	4.5
9 自由に利用できるテレビや VTR がない	7.7	5.3
10 保育で利用したいと思う幼児番組が見当たらない	7.7	8.8
11 保育におけるテレビ番組の効果的な使い方がわからない	6.9	6.6
12 テレビは幼児の成長にとって好ましくない影響を及ぼすと思う	5.0	11.5
13 テレビ以外の教材の方が，教育効果がみられる	4.8	8.2
14 幼稚園･保育所でのテレビ利用に保護者が反対する	4.0	7.8
15 とくに問題はない	5.4	5.1

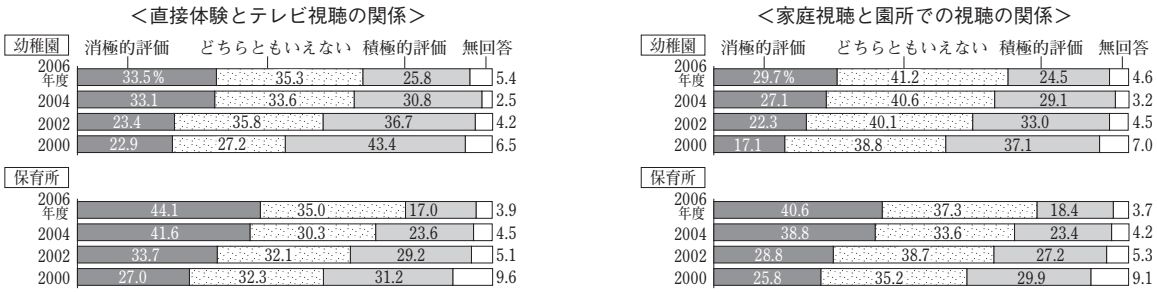
その背景には，いくつかの要因が存在している。第一は，1990年に施行された「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」で，幼児の直接体験の重要性が強調されたことにより，“テレビ視聴は間接体験で好ましくない”という印象を，保育者たちの間に広める結果になったと考えられる。

2000年施行の教育要領改訂の前段となった，文部省の調査研究協力者会議の最終報告書**「時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方について」**（1997年11月）でも，情報メディアのマイナス面が取り上げられる場面が少なくなかった。

さらに，2004年には，日本小児科医会と日本小児科学会が，相次いで子どもとメディア

図 7　幼稚園・保育所でのテレビ利用に対する考え方の変化

（100%= 全園・所）



消極的評価 = 教育要領，保育指針では，直接体験を重視している。テレビを用いた保育は間接体験であり，幼稚園・保育所でテレビを利用することには，積極的になれない。

積極的評価 = テレビは，幼児の直接体験を誘発する力，直接体験に意味づけする力，直接体験からだけでは得られない世界を提供する力を持っており，幼稚園・保育所での利用には教育的な意味がある。

消極的評価=幼児は家庭で十分テレビを見ているので，番組の内容のいかんにかかわらず，幼稚園・保育所では，テレビは見せたくない。

積極的評価=視聴する番組の内容や，テレビの見方は，家庭と幼稚園・保育所とでは異なっている。子どもの好ましいテレビの見方を育てる意味でも，園・所でのテレビ視聴は，重要な意味がある。

に対する提言を発表した。ここで取り上げられたテレビの影響の内容や因果関係の解釈については，説得力あるものではないとする専門家たちの指摘も多いが，「2歳までの子どものテレビ，ビデオ長時間視聴を控えること」を基調とした医学の専門家たちの提言は，保育関係者に強いインパクトを与え，テレビやパソコンなどのメディアの教育的な利用をも抑制している可能性があると考えられる。

(2) メディアの影響に対する保育者の評価

多くの幼児に毎日接し，客観的に観察している保育者は，家庭でのメディアとの関わりが子どもに及ぼす影響について尋ねる適任者といえる。そこで，この調査では，幼稚園・保育所でのメディア利用ばかりでなく，“幼児の生活とメディア”全般に関わる内容も，取り上げてきた。2006年度調査では，テレビのほか，ゲームとパソコンについても，幼児に対する全般的な影響の評価を調べた(**表10**)。

表10　メディアに対する影響の評価

（100%= 全園・所）

	幼稚園（%）			保育所（%）		
	テレビ	テレビゲーム	パソコン	テレビ	テレビゲーム	パソコン
良い影響の方が多い	7.3	0.4	3.3	3.5	0.2	3.9
どちらともいえない	72.6	27.9	81.1	69.5	21.7	74.0
悪い影響の方が多い	16.8	68.6	12.1	23.8	75.4	18.4
無回答	3.3	3.1	3.5	3.1	2.7	3.7

テレビとパソコンでは「(良い，悪い一概に) どちらともいえない」との回答が圧倒的に多いが，テレビゲームでは「悪い影響の方が多い」という回答が最も多い。

幼児が家庭で視聴している番組も含めたテレビ全般に対する保育者の評価は，幼稚園・保育所での幼児向けテレビ番組の利用にも影響を及ぼしている。テレビは好ましい影響の方が多いと考える園所では，幼稚園・保育所での保育目的のテレビ利用が多いのに対して，好ましくない影響の方が多いと考える園所では，保育の場での利用が少ない。

〈テレビ全体評価別にみたNHKテレビ利用率〉

	幼稚園	保育所
良い影響の方が多い	44.7%	66.7%
どちらともいえない	35.3	48.6
悪い影響の方が多い	19.5	32.8

①幼児が家庭で自由に見ている番組と保育の一環として幼稚園や保育所で視聴する番組は異なる種類であることも多いこと

②保育者や同年齢の多くの子どもたちと一緒に視聴することで得られる経験は，ひとりで視聴することも多い家庭でのテレビ視聴と異なる意味をもつこと

などを考えると，子どもが家庭で十分見ていることや，テレビ全般のマイナス面に対する懸念が理由となって，保育の場で教育目的のテレビ利用が行われなくなっている状況については，抜本的な議論が必要であろう。

(3) 幼児向け番組に対する多様な期待

幼稚園・保育所でのテレビ利用は減少傾向にあるが，幼児向け番組そのものへの期待は，相変わらず大きい(**表11**)。「子どもの心情を豊かにし，想像力を育てる」「音楽・リズムの楽しさ，音楽に対する親しみを育てる」「生き物に対するやさしさと，自然とのふれあい，身近な環境とのかかわりを強める」「子どもの遊びや活動の意欲を高める」をはじめ，期待の内容は多岐にわたっている。

近年とくに注目されている，乳幼児期に体を動かすことの重要性に関連して，「年齢に応じた手足や体の動きを促進させる」ことへの期待が幼稚園でも保育所でも，2年間でほぼ倍増している。こうした動向に呼応して2004年に登場した『**からだであそぼ**』は，保育所で

表 11　幼児向け番組への期待の内容

（100%= 全体）

【複数回答：幼稚園で回答が多い順】	幼稚園（%）	保育所（%）
1 子どもの心情を豊かにし，想像力を育てる	52.6	50.0
2 音楽・リズムの楽しさ，音楽に対する親しみを育てる	45.3	47.3
3 生き物に対するやさしさと，自然とのふれあい，身近な環境とのかかわりを強める（生活経験を広げる）	40.7	33.8
4 子どものあそびや活動の意欲を高める	38.9	29.1
5 ことば（日本語）に対する興味・関心を育てる	37.6	35.0
6 子どもの表現意欲や創造力を刺激し，造形活動を育成する	30.8	23.0
7 身の安全や健康，防災などに対する関心を育てる	27.2	23.8
8 世界にはさまざまな国や文化，ことばがあり，異なったくらしをしている子どもたちがいることに気づかせる	24.5	22.5
9 読み聞かせで童話や絵本の世界を伝える	23.5	23.4
10 年齢に応じた手足や体の動きを促進させる	22.4	26.8
11 人とのかかわりをもつ力を育てる（自分の考えを伝える力やコミュニケーションする力）	20.6	17.0
12 子どもの基本的な生活習慣や態度を育てる	20.0	16.8
13 世の中の重要なできごとに対する関心を育てる	15.2	11.9
14 数や形・量の概念への興味・関心を育てる	14.6	15.6
15 外国語に対する興味・関心を育てる	13.5	12.9
16 テレビなどさまざまなメディアに対する好ましい態度を育成する	4.6	3.7

よく利用されているという状況もある。

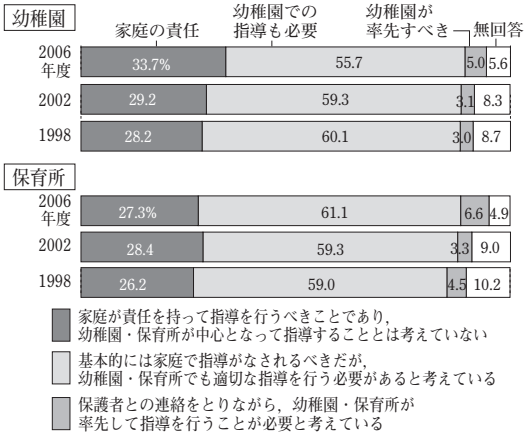
表11の結果は，幼児が家庭で視聴するテレビへの期待の意味も含まれていると思われるが，ここに示された期待の内容を考えると，教育要領や保育指針が強調する「自然体験，社会体験などの直接的，具体的生活体験」を促進させる目的での番組活用が十分可能である。幼稚園・保育所で利用されるための工夫が，番組制作者にも，保育者にも，両者に関わる研究者にも求められているといえよう。

(4) メディア・リテラシー育成の取り組み

すでにみてきたとおり，保育現場におけるメディアの影響に対する関心は高く，この調査では，メディア・リテラシーという言葉が注目される以前から，幼児のテレビやテレビゲームなどメディアとの関わりに対する態度育成等について調べてきた。**図8**に示したとおり，相変わらず家庭でのしつけの責任を強調する傾向が強いが，幼稚園や保育所での指導の重要性も認識されている。

図 8　幼児のメディアに対する態度育成の考え方の変化

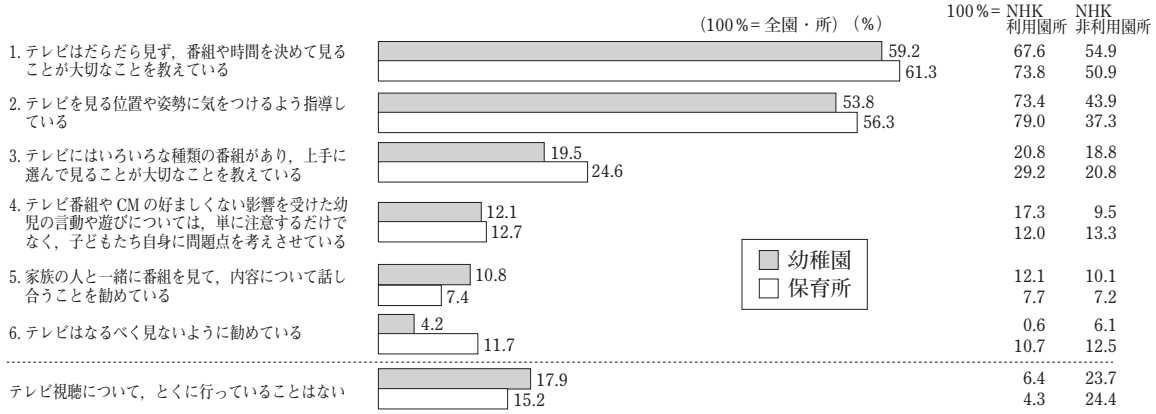
（100%= 全園・所）



テレビ視聴については，**図9**（P.78）に上げた項目を示して，具体的な指導の内容について調べたところ「番組や時間を決めて見ること」や「テレビを見る位置や姿勢」に関する指導は，それぞれ5～6割の幼稚園や保育所で行われていることがわかった。また「テレビにはいろいろな種類の番組があり，上手に選んで見ることが大切なこと」の指導も，幼稚園では全体の5分の1，保育所では4分の1で行われている。図の右欄に示したとおり，このような指導は，NHK幼児向けテレビを利用している幼稚園や保育所のほうが，そうでない園所に比べて熱心である。

保育の一環として幼児向け番組の視聴を取り入れている幼稚園や保育所では，9割以上が，家庭でのテレビ視聴にも関わるテレビの見方について幼児の態度育成を行っているのに対して，保育でのテレビ利用がない幼稚園や保育所では，その4分の1が，テレビ視聴に関する態度育成を全く行っていないという，二極分化傾向がみられる。

図９　テレビ視聴に関する幼稚園・保育所での指導の内容



メディア・リテラシー育成に関する自由回答

「家庭生活がテレビ漬けにならないよう，メディアリテラシー教育啓発の必要を痛感している」（幼稚園）

「テレビの適切な利用の仕方を，放送を通じて家庭に知らせてもらいたい」（幼稚園）

「当園では，時に応じてお昼のニュースを見せることもあり，家庭でのニュース視聴も勧めている。今を伝えるテレビの特性を生かして，身近な教材として見る内容や与え方など，家庭と連携して良い方向へ持っていきたいと思う」（保育園）

より多岐にわたる内容を含む，本格的な幼児のメディア・リテラシーの育成を目指す観点からは，幼児教育，発達心理学，教育工学など様々な分野の研究者が，幼稚園や保育所と共同で実践研究を進める例が増えている。前項で紹介したパソコン活用の保育に関する研究もその一例である。

幼稚園で継続的に視聴されている幼児向け番組の様々な要素が，幼児にどのように理解され，その結果がどのような態度や行動となって表れるか分析することで，保育におけるテレビ視聴というメディア体験をメディア・リテラシー教育に生かす手法を見出そうとする研究も進められている[4)]。

小学生のコミュニケーション能力の低下の問題に着目し，幼児期に人と協力したり，自分を表現したりする機会を増やすこと，合わせて，メディア社会を生きていくうえで，早い時期からメディアによる表現にも触れておく必要があるという立場から，大学生と幼稚園児による映像制作体験と相互交流を企画し，5歳児のテレビの特性理解分析を試みた研究も興味深い[5)]。

小学校以上の校種で注目されているメディア・リテラシー教育のカリキュラムについて，子どもたちに求められている思考力や判断力の育成のためには，幼児期も含めて俯瞰することが重要との立場から，幼児教育段階のメディア・リテラシー教育カリキュラムの開発研究に取り組む例もみられる[6)]。

まとめにかえて

幼児を取り巻く環境が大きく変化する中，幼児教育・保育が取り上げる内容や手法にも，変化が求められる時代である。「幼児にとってのメディア」についても，これまで以上に広い視野に立った議論が必要であろう。

「幼児期には直接体験が重要なので，間接

体験となるテレビやパソコンは保育に持ち込まない」という考え方や，自ら利用を体験せず，メディアに対する一方的なイメージを抱くことは，重要な発達段階にある幼児に，新しい可能性提供のチャンスを逃すことにもなりかねない。

幼児向け教育番組は，「人の気持ちを理解し，じょうずな人間関係をつくる」「表現力を高める」「自然に親しむ」など，いずれも現実社会での幼児の活動や生活を豊かにすることをねらいとしている。そして，幼稚園や保育所で，専門家である保育者の指導のもと，一定のねらいをもって友だちと一緒に視聴し，共感したり，自分と異なるとらえ方があることを知ったり，番組からヒントを得て新しい遊びを創り出すといった様々な関わり合いが生まれるところに，大きな意味がある。

幼稚園・保育所での放送利用が減少する過程で，長年にわたる教育番組の効果的な利用経験の蓄積が，新しい世代の保育者に十分継承されてこなかったという課題もある。残されている貴重な記録に改めて目を向けることも，もちろん意義あることだが，それこそ幼児期からのメディアの特性理解やメディアを通した自己表現が重要という考え方も強まる今日，メディア社会ともいわれる新しい環境に即した形で，新たな放送利用のスタイルを生み出すことも重要であろう。

保育者自身の利用という点では，パソコン・インターネットへの関心が高まっているタイミングでもある。保育者が，幼児のための，様々なメディアの効果的な利用の可能性を学ぶ機会を提供することについては，本稿でも紹介したとおり，保育者や保育を目指す学生，あるいは保護者も視野に入れた書籍が登場している状況が注目される[7)]。

保育者向け番組や，「キッズワールド」のようなウェブサイト，ワークショップ・研修など様々な方法で，放送をはじめとするメディアを利用した様々な保育の事例や研究成果の紹介を行い，メディア活用の意義や効果を伝えると共に，今後の可能性についての議論を進めることも必要であろう。　（こだいら さちこ）

注：

1）Benesse 教育研究開発センター（2006）『第 3 回幼児の生活アンケート報告書：乳幼児を持つ保護者を対象に』（pp.54-56 p.138）

2）Joshi, A, Pan, A. & Murakami, M.（2005）. *Early Childhood Educators' Beliefs about Computers in Early Childhood Education in the US and Japan,*（2005 年 3 月アメリカの学会 SITE：Society for Information Technology & Teacher Education で発表された論文）

3）保育現場でのパソコン活用例や研究成果を紹介した参考文献の一例：
- 湯地宏樹（2004）『幼児のコンピュータゲーム遊びの潜在的教育機能：メディア・リテラシー形成の観点から』北大路書房
- 倉戸直実・岸本義博編著（2004）『コンピュータを活用した保育の実際』北大路書房
- 中坪史典（2005）『コンピュータを利用した保育実践に関するエスノグラフィー的研究』北大路書房
- 村上優編著（2006）『保育の創造を支援するコンピュータ』保育出版社
- 村上涼・武市泰彦（2006）「幼児は『マルチメディアを利用した絵本』をどのように読むのか：中間報告」『発達研究』（発達科学研究教育センター紀要）20 巻，103-116.

4）駒谷真実（2006）『テレビと幼児のかかわり③番組『つくってあそぼ』の視聴に関わる幼児の理解と行動』日本放送教育協会

5）藤川大祐・中野敬子（2005）「幼稚園児に対するメディアリテラシー教育の試み：5 歳児保育における実践を通した考察」『日本教育工学会第 21 回全国大会発表論文集，255-256.

6）浅井和行（2006）「メディア・リテラシー教育のカリキュラム開発」平成 15 年度～平成 17 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書「我が国におけるメディアリテラシーの理論と実践カリキュラム開発研究」（課題番号：15300286）研究代表者小笠原喜康，31-38.

7）堀田博史（2007）『緊急提言 どう取り入れる？どう使う？幼児とメディア』学習研究社・・・本書では，放送番組利用の事例解説も含まれている。